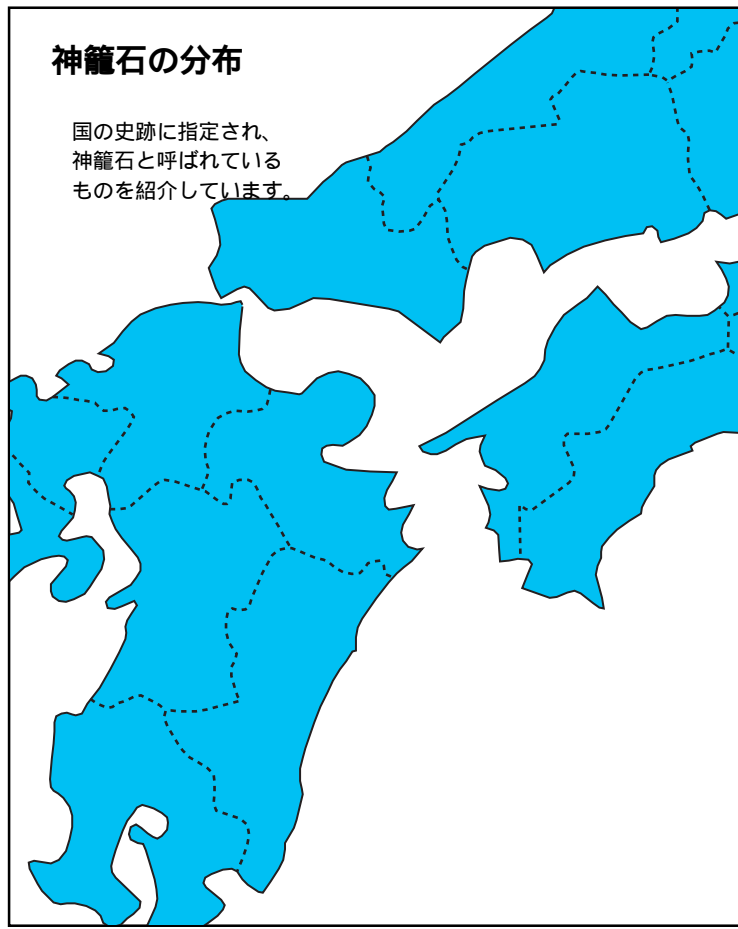


この貴重な神籠石を、どのように守っていかば良いのでしょうか。松岡 知る人ぞのみ知るで、今、神籠石についてきちんと理解している人は、少ないのではないのでしょうか。先ほどからお話ししたように、神籠石は、まだまだ多くの謎を秘めているとても魅力的な私たちの大切な財産なのです。「石城神社」や「第二奇兵隊練兵場跡」などの史跡、たくさんの伝説の石、「イワキ五星アジサイ」という珍しい花も自生している石城山を、もっと多くの人に知ってもらいたいと思います。



そのためには、ぜひ神籠石をまわすぐりに有効に活用してほしいですね。どのような活用方法があるのかすぐには考えつきませんが、市民の皆さんが協力してアイデアを出し合えば、文化財保護の視点だけでなく、地域の活性化にもつながるような画期的なものが見つかると思います。そして、そのことが神籠石を守っていくことになるのではないかと思っています。

そんな「石城山神籠石」は、将来に向けて、さまざまな可能性を秘めているのではないのでしょうか。

## 石城山、そして神籠石は私の誇りであり自慢です

### いろいろな魅力をもった石城山

私たちは、谷さんに案内してもらい、実際に神籠石を観察してみました。山道に備え、はりきって支度してきた私たちとは対照的に、谷さんはスカートにパンプスという格好。「私は石城山で暮らしていたので、山には家に帰るような気持ちなんです。だから普段の格好と一緒。」そう話す谷さんは、起伏のある山道でも平然とした足取り。早くも谷さんと石城山の関係が感じ取れたような気がしました。

今回は、石城山の東側から反時計回りに、北、西へと神籠石を巡るコースを歩きました。今は、南側の大部分の神籠石が土に埋もれて見ることができないのが残念です。山中の遊歩道をしばらく進むと、「東水門」に到着。東西南北にある水門の中で、一番大きいものです。それぞれの水門から湧き出る清水は、昔からどんな干ばつの中でも絶えることなく、ふもとの田畑に潤いを与えていたそうです。

水門付近の神籠石は3、4つほどの高さに積み重ねられています。昔の人は、どうやってこの石を積み上げたので



石城山の語り部  
谷 千寿子さん

石城山の9合目に20歳まで暮らす。石城山にまつわる昔話や風習を今に伝える「石城山の語り部」として精力的な活動を続ける。大学や講座などの講師としても活躍中。78歳、岩田在住。

しょうか。石は派手さはありませんが、見るものを惹きつける神秘的な趣き。神域説が唱えられる理由がわかるような気がします。「子どもの頃、父からいつも神域の中に住んでいると言いつけられました。今も、そのことが誇りであり自慢なんです。」そう谷さんは熱く語ります。

東水門から北方面に進む途中、谷さんは、私たちに一枚の葉っぱを採ってくれました。「これは、山のブルーベリー。子どもの頃、喉が渴くと、この葉を口に入れて山を歩いていました。ほかに、ドクダミ、ゲンノシヨウコ、オオバコ、ツバキ

「この山は、薬草の宝庫でもあるんですよ。」「何の気なしに歩いていると、つい見逃してしまっているんです。」「石城山には、たくさんの種類の薬草が自生しているそうです。」

### 石城山に残る

#### いにしえからの言い伝え

「北門」付近には、「夜泣石(よなきいし)」「とされる岩があります。ここは、昔、まちという娘が石城判官という一目惚れをした相手と慕い、夜になると泣いていた所だそうなんです。この岩は、今も悲しそうな表情をしています。村の人は「まち岩」と呼んでいます。」

北門を過ぎると、「龍石(たついし)」「があります。その形は、まさに天に向かって大きく口をあけた龍の頭。」「村の人は、悪いことをしたら、この口から出られないと恐れていたようです。石城山を守るためにつくられたのかもしれないね。」と谷さんは話します。

また、500mほど離れた「西水門」付近には、「龍尾石(りゅうびいし)」「があります。離れたところにある二つの大きな岩が、それぞれ龍の頭と尾、その間をつなぐ神籠石が龍の体を成しているというわけなんです。昔、石城山に木々が少なかった頃、月夜になると、この龍が照らさ

れ風になびく草も手伝って、ふもとから、まるで龍が空を飛んでいるかのように見えたそうです。

「北水門」は、急な坂道を下り、湿ったところにありました。谷さんが子どもの頃は、水門の中も遊び場の一つだったそうです。

谷さんは、石城山や神籠石にまつわる昔話や風習を『石城のむかし話』として、手づくりの冊子にまとめていますが、その中で、「この水門は「山姥の穴」として登場します。」「むかし話は、親から子へと代々語り継がれ、私も祖父や父によく聞かされました。まだまだ数え切れないほどありますよ。」と話す谷さん。むかし話の続編が出来上がるのを今から楽しみにしています。

### 石城山の伝説

#### 山姥(やまんば)の涙

昔、神籠石の水門に、村人の頼みを聞いてくれる心やさしい山姥が住んでいました。ある時、祭りに使うために山姥から借りたおわんを村人が割ってしまい、そのまま返したために、山姥はたいそう悲しみます。山姥は水門から山の清水を村人に与えるかわりに、自分たちで努力して祭りのための道具を揃えるようにと伝えました。



市立図書館には、谷さんから寄贈された「石城のむかし話」があるので、興味のある方はぜひご覧ください。(問合せ 0833-72-1440)

## 取材を終えて

室積に住む私は、これまで「石城山神籠石」のことを耳にしたことがあ程度でしたが、今回の取材を通して、少しでも神籠石や石城山について知ることができました。

お二人の話や資料を聞き、資料を読んだりして得た知識は、私の好奇心を予想以上に沸き立たせてくれました。国の史跡であり、歴史のロマンあふれる「石城山神籠石」は、まさにまちの誇り、財産であると再認識しました。

石城山に登る道は狭く、大型バスで大人数の観光はできません。しかし、私は、むしろそうした神秘的な雰囲気、神籠石の神秘性と相まって、一つの魅力をかもし出しているのではないかと思います。また一方では、この「石城山神籠



夜泣石(よなきいし)



龍石(たついし)



龍尾石(りゅうびいし)

石」を、もっと多くの人に知ってもらい、活用していくことが必要だと思います。

そのためには、石城山を、例えば花や薬草の名所にしたりして、もっと付加価値を高めていく必要があると思います。また、「石城山神籠石」を、いつも安全に観察しながら散策できるように、遊歩道の草刈りなどは、私たち市民が協力して取り組んでみたらどうでしょうか。

そして、光市のほかに全国で8か所ある神籠石。それらのまちでは、どのような取り組みがされているのか、私はとても興味があります。共通の財産を持つまち同士で意見交換などができれば、きっと「神籠石」の魅力も、さらに輝くのではないのでしょうか。